



志度高だより 一飛翔の窓一

第106号
(H22.9.1)

「夏物語」

この夏はことのほか暑かった。電気の使用量が最高だったとか、ビールの消費量が群を抜いて伸びたとか、いろいろ変化に富んだ期間だったのではないかと想像する。

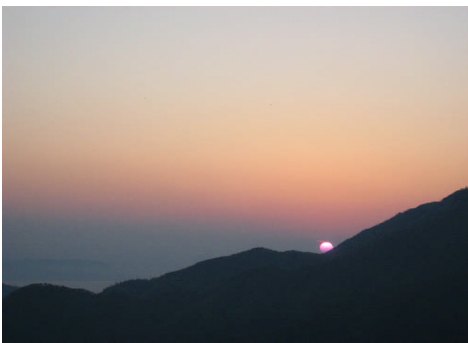
なのに、私個人としてはこの夏はまったくさえないなかった。あいにくまとまった時間が持てず、当初計画していたことができなかった。まあ強いて言えば、気の抜けたサイダー、もしくはゴムの伸びたパンツというところか。一番悔やんだのは、フランス行きを計画していたのに、それが頓挫したこと。それに端を発したように、暑さとの相乗効果で、生活意欲がぐんぐん下降線をたどった。起爆剤にと甲子園に行ったが、これも焦げ付くような猛暑で試合観戦どころではなかった。

以上のように極めて刺激の少ない夏ではあったが、ちよっぴり心の渇きを潤す出来事もあったので、それを振り返って夏に微笑んでもらえなかった中年男の慰めとしたい。

「おおーまさしく今のはトマコだったぞっ！」車のハンドルを持つ手がこわばった。平たい頭に細長い胴と手足。茶色の全身。君はまだ生きていたのか。いやー感激だよ。もうすっかり見なくなったので、絶滅したのかと心配していたんだよ。トマコ。ご存知ですか。トマトではありません。北海道の苫小牧でもありません。通常はイタチと呼ぶのだろうが、私はどうあろうと「トマコ」と呼んでいる。買い物に行く途中、トマコが二匹車道を横断したのだ。おおー懐かしいトマコ。そう叫んだ。ところが数日後、別のところでトマコが車に轢かれてぺしゃんこになっていた。まるでタコせんべいを貼り付けたように。それでもトマコはトマコの姿を崩さず、「死んでも俺はトマコだ」とアピールしていた。人間だけでなくトマコにとっても住みづらい世の中になってしまった。



おい、クツワ虫が来たぞ！ クツワ虫の本名を私は知らない。住所もメールアドレスも。前述のトマコと同じで、私の生まれた地域では「クツワ虫」と呼んでいる。そのクツワ虫もすっかり姿を消した。ガチャガチャガチャと耳障りでとにかくうるさいが、それでも夏の風物詩の一つで、子供の頃にはそこら中にクツワ虫がいた。それが今ではどうだ。ガチャの一声もない。ところが5年前、クツワ虫がいなくなったなあ、とのじいちゃんの呟きが聞こえたか、突然どこからともなくクツワ虫が現れた。それから毎年窓辺近くで鳴くようになった。まるでじいちゃんの慰問のように。そして今年もやってきた。ガチャガチャガチャ。おい、今年は静かにしとけ、ただでさえ暑いんだから。でも、じいちゃんの慰問だから仕方ないか。因みに、じいちゃんの耳は固くなり、クツワ虫の囁いた鳴き声もまったく聞こえない。おい、じいちゃんが難聴になっても構わないからもっと鳴け。ガチャガチャガチャ。これくらいですか。合格。



あれ雉じゃ。見ると鴨部川中央部の堤防に羽を広げた雉がいた。やはりいたか。私はその存在にもう数年前から気が付いていた。朝ランニングをしていると、川の中ほどでケンケンと鳴く。葦に隠れて姿は見えない。なにも川に雉が住まなくてもいいものと思うのだが、それは雉の自由。うーん、なかなかやるのー、雉くん。そのうちに雉鍋にしてやるから楽しみに待っておれ。そのときには相棒とネギを忘れるなよ。鴨ネギならぬ雉ネギじゃて。

気の置けない男ばかりで女木島に行った。自分の影さえ焼けるカンカン照り。炭がパチパチ、肉ジュージュウ。冷えたビールがキンキンで、久しぶりに食べて、飲んで、泳いだ。民宿の夜の秘密談義もなかなかのものでしたぞ。ここで一句。ジュージュウと焼ける夏の背中にもう秋。うーん詩的じゃのー。

婆さんが一人、猛暑に乾いて小さくなりそうだ。それでもそばを通りかかった私に、ヒマワリじゃ、と笑った。そこには数え切れないほどのヒマワリが太陽に向かって咲いていた。ヒマワリの花が婆さんの笑顔に見えた。伝染するようないい笑顔だった。長生きするといいこともありますね。

胃にしみた。そして掛け値なしに、うまい、と感じた。きらきら輝く氷の断片にピンクがにじむ。随分久しぶりだな。最後に食べたのはいつだろう。この夏、一番おいしかったのは、搔き氷。

校庭の木陰に蟬の屍。油蟬もクマ蟬もミンミン蟬もツクツク法師もみんな、命を削ってこの夏を終えた。お疲れ様。彼らにそっと合掌。

残暑厳しき折、体と心にそっと優しさを。